

新たなメールシステムに、再び、ミラポイントを採用 LDAPと連携した大規模システムの安定性は 教育分野でも高く評価

駒澤大学は、2001年にオープンソースを使ったメールシステムを改革するために、ミラポイントの各種Eメールサーバを導入。その後、ユーザー数の増加とスパム対策を目的に、2006年9月、再びミラポイントの最新技術を採用した。同大学は2006年にミラポイントが最新モデルとしてリリースしたRazorGate® 500 (RG500/Eメールセキュリティアプライアンス)ならびに、Mirapoint® Message Server 5000 (M5000/Eメールサーバアプライアンス)の国内初ユーザとして、統合された安全なEメール環境構築を目指すべく、アンチウイルス、アンチスパム、LDAP連携などを強化し、ミラポイントの持てる特長を余すことなく活用した。

ユーザー事例 | 教育関係



駒澤大学

顧客名
駒澤大学

要求

- 可用性が高いメールシステムの構築
- 管理負担と管理コストの低減
- 急増するスパムへの対策
- 単一ベンダーによる信頼できるサポート

ソリューション

- 「Mirapoint Message Server 5000」4台
(クラスタ構成×2)
- 「Mirapoint RazorGate 500」4台
(冗長化構成×2)

導入効果

- 限りなくゼロに近いダウンタイムの実現
- LDAPと連携した教職員、学生アカウントの
容易な管理
- スパムの激減と誤検知の回避を両立
- メールアプライアンスの導入により
管理工数が軽減

伊藤忠テクノソリューションズグループ
CTC SP

 **MIRAPOINT®**
The Messaging Experts

ユーザーの一元管理で管理の負荷が軽減

駒澤大学のメールシステムでは、2001年初頭までオープンソースのEメールアプリケーション「sendmail」を利用し、汎用OSと汎用サーバとを組み合わせて、NIS (Network Information Service) によるユーザー認証管理をおこなっていた。

しかし、sendmailは設定等が複雑なうえ、ソフトウェアのアップデートやセキュリティホールなど、多くの管理項目がシステム管理者の負担となっていた。また、大学はその業務上、新入生と卒業生のアカウントを変更する必要があり、毎年25%ものユーザー(学生)の削除・新設が求められるなど、変更処理が煩雑で、このままフリーソフトを使い続けることへの限界を感じていた。

そこで、メールシステムの運用・管理工数の削減や、LDAP認証の導入によるユーザー管理コストの省力化などを条件に、メールシステムの更新を決断。伊藤忠テクノソリューションズ(CTC)から新たなシステム提案を受けた駒澤大学は、ミラポイントの存在を初めて知ることになった。

「当初は、従来通りオープンソースを使い続ける選択も考えましたが、今後のセキュリティ対策や管理コストなどを考えると、ミラポイントの

メールアプライアンスを選択する方が、万が一の際の管理面では有効と判断しました」と語るのは、SRAの分銅淳至氏。SRAは、駒澤大学から情報システムの管理・運営を受託する企業として長年貢献してきた。

2001年4月にスタートした、駒澤大学ネットワークシステム(通称、「KOMAnet」)構築プロジェクトと並行し、ミラポイントのメッセージサーバ「M2500」×2台のクラスタ化によるPOP/IMAPアクセスと、「MD300」×2台によるSMTP配送/アンチウイルスのゲートウェイが構成され、LDAPによる認証管理を実現した。

それにより、ソフトウェアのアップデート数が激減したという分銅氏は、「既存LDAPとミラポイントのメッセージサーバが自動的に連携し、認証成功後自動的にメールボックスが生成されるオートプロビジョニング機能で、ユーザーの一元管理が可能になり、管理の負荷や複雑性が大きく軽減されました」と当時を振り返る。

スプール量不足とスパムの急増も課題に

しかし、その数年後、サーバ上に蓄積するメール容量の増大が新たな課題として浮かび上がってきた。Webメールを採用する駒澤大学では、2001年当時ユーザー1人あたり30MB

程度のスプール量を想定していたが、次第に容量不足への不満が起こりはじめたのだ。



駒澤大学
総合情報センター
情報ネットワーク課 係長
成田早苗氏

さらに、スパムメールの急増も深刻な問題となっていた。2005年頃になると、メール受信の半分以上がスパムに占領されるユーザーも現れ、必要なメールも探せなくなるなどの事態となりつつあった。

そこで、次期リブレース時には、LDAP連携は維持しつつ、スパム/ウイルスメール対策を重点課題とし、IMAP4の導入によるデータの集中管理も見据えて、一人当りの容量を100MBまで大幅に増やすことを計画。

再びベンダーにこだわらず、複数社のメールシステムを検討していったが、やはり今回もミラポイントが適切と判断された。それは、システムとの統合性やユーザー環境などを比較した結果、過去6年間に証明された製品の安定性、そして管理の容易性において他社を上回ると認められたからだ。

2006年5月と8月の2度の構築を経て、9月から新たなメールシステムが開始された。今回は、Eメールセキュリティアプライアンス「RazorGate 500」(RG500)と、最新



駒澤大学
総合情報センター
情報ネットワーク課
長谷川裕美子氏

のメッセージサーバ「Mirapoint Message Server 5000」(M5000)を選択。SMTPおよびPOP/IMAP配送用に2セット冗長化されたメールゲートウェイRG500(4台)と2セットクラスタ構成されたメールストアサーバM5000(4台)間のアクセスをLDAP参照機能を用いインテリジェンスに振り分ける3tier(スリーティア)構成を実現させた。

3tier (スリーティア) 構成を採用

インターネット側とキャンパスネットワーク側に設置されたRG500は、それぞれLDAPに登録され

た情報に基づき、ユーザごとに配送経路をメッセージサーバに振り分ける形でSMTPのプロキシとPOP/IMAPのプロキシを実現している。加えてアンチスパムとアンチウイルスの機能も、これらのRG500に負荷分散して搭載した。

利用者は、複数のサーバを意識することなく、シングルポイントで受信サーバや送信サーバを設定できるので、利用側も管理側も利用効率が飛躍的に高まった。もちろんメールサーバもクラスタ構成により冗長化が図られている。

Mirapointが提唱する3tier構成を採用することにより、メールゲートウェイおよびメールサーバは全てが2重化され、限りなく99.999%(トリプルナイン)に近い連続稼働率が確保された。これにより、当初からの目標とされていた「学外との重要なコミュニケーションツールとしてのメッセージインフラの冗長性」が高いレベルで確保されたこととなる。

なお、このM5000採用は、日本で最初の導入例となった。

シングルベンダーによる安心感

「スパムメールについては、ある程度その増加を予測していたのですが、2006年のリブレース直前から急に増加し、それがRG500の導入タイミングとぴったり一致したのは、とても幸運なことでした」と話すのは、駒澤大学の総合情報センターで情報ネットワーク課の係長を務める成田早苗氏。同氏はシステム全体の適合性について、SRAと共同で検討する役割を担ってきた。

「現在、スパム判定の設定はユーザー自身に任せているため、

検知率に個人差がありますが、高精度な検知とエンドユーザーによるジャンクメール管理機能など、必要なメールが削除されない安心感も大学としては重要でした」(成田氏)

また、同じ総合情報センターの情報ネットワーク課に所

属し、ネットワークの運用全般を管理する長谷川裕美子氏は、「以前と比べてスパムが激減したという、目に見える効果は大きかったようです。ある先生からは、毎日100件以上もスパムを受け取っていたが、数件まで減ったので助かったという評価をいただきました」と述べ、RAPID™ Anti-Spamの効果を高く評価する。

一方、ユーザー数の増加とともに、メールシステムにさらなる信頼性が必要になってきたと話す分銅氏は、「CTCさんの協力もあり、できる限りオープンソース系のシステムは排除し、アプライアンスを導入することで管理工数の軽減を図ることができました」と語る。



株式会社SRA
分銅淳至氏

「シングルベンダーであるミラポイントと、そのトータルなシステムのサポートを担うCTCグループとの協力関係により、万一障害が発生した場合でも原因がソフトなのか、ハードなのか、OSなのかといった切り分けをする必要がないのが安心です」(分銅氏)

駒澤大学は、今年で設立125周年を迎える。過去に学び、未来に生かす校風が、セキュアなメッセージングインフラを堅実に手がけてきたミラポイントと共通する部分は多い。それが2度も同校で信任を受けることができた背景にあるのかもしれない。

2006年9月以降の新メールシステム図

